

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 9 日現在

機関番号：32406

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24720336

研究課題名(和文) 啓蒙専制期ハプスブルク君主国における出版者の社会的ネットワークの研究

研究課題名(英文) A Study of the Social Networks of the Publisher in the Habsburg Monarchy under the Enlightened Despotism

研究代表者

上村 敏郎 (UEMURA, Toshiro)

獨協大学・外国語学部・専任講師

研究者番号：20624662

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、ハプスブルク君主国のヨーゼフ2世の治世、その啓蒙専制体制において皇帝による「上からの啓蒙」と知識人による「下からの啓蒙」が交わる場所としての出版メディアに着目し、出版者の社会的ネットワーク構造を分析することで、啓蒙専制体制の公共圏の問題を明らかにするものである。分析の対象として、とくにウィーンで活躍した出版者の一人であるゲオルク・フィリップ・ヴーヘラーを選択した。今まで収集し、分析した史料からいえることは、彼の出版活動がドイツ語圏各地の書籍業者やカトリック圏におけるプロテスタント支援団体、秘密結社ドイツ・ユニオンと結びつきながら、おこなわれていたということである。

研究成果の概要(英文)：This study focuses on publication media, regarding it as the place where “enlightenment from the top” from the emperor and “enlightenment from the bottom” from the intellectuals crossed, during the reign of Joseph II of the Habsburg Monarchy. It also examines the problem of the public sphere under enlightened despotism by analyzing the structure of social networks in a publisher. As the object of my analysis, I have chosen Georg Philipp Wucherer, a publisher that played an active part in Vienna in particular. Based on the historical materials collected and analyzed, this study confirms that their publishing was tied to book supplier in the German speaking parts, the Protestant support group in the Catholic area, and the secret society Deutsche Union.

研究分野：西洋史

キーワード：ハプスブルク君主国 書籍商 啓蒙専制 ヨーゼフ2世 ウィーン 社会的ネットワーク

## 1. 研究開始当初の背景

筆者は本研究開始前から啓蒙専制期ハプスブルク君主国におけるウィーンを中心とした言論空間に関する研究を行ってきた。啓蒙専制期、君主は王権神授というベールを脱ぎ捨て、自らの正当性を「公論」に委ねた。これは、「公論」が統治者の裁定者として、彼が専制君主なのか啓蒙君主なのかを決めることを意味する。公共的な問題に関して議論し、「公論」を作り上げていく言論空間を公共圏とするならば、公共圏は啓蒙専制という政体の理解には必要不可欠な問題である。

これまでの公共圏研究で代表的なものを挙げるとすれば、ボディやヴァンガーマンの啓蒙専制君主ヨーゼフ二世治世下のパンフレットを分析した研究であろう(Leslie Bodi, *Tauwetter in Wien*, Wien 1995; Ernst Wangermann, *Die Waffen der Publizität*, Wien 2004)。1781年、啓蒙専制君主ヨーゼフ二世は、検閲の大幅な緩和を行い、パンフレットを中心とする出版ブームが起きた。ウィーンで流行したパンフレットとは、通常64ページ以下の八折判で、10クロイツァー程度の安い価格で、日常生活から政治に関するものまで様々な話題を提供する印刷メディアである。こうした出版物は国境の垣根を越えてドイツ語圏全域に広がっていった。しかし、一般的にドイツ南部のカトリック地域と共にオーストリアは啓蒙主義の観点から後進的な地域と見なされていたこともあり、ウィーンで出版されたパンフレット群が顧みられることは少なかった。ボディの研究はこうしたパンフレットの史料価値を再発見した点で重要な役割を果たした。またヴァンガーマンは、出版物、特にパンフレットが政治闘争の中で「公開性」という政治的武器として機能したと主張した。彼の研究は「上からの啓蒙」と知識人による「下からの言論活動」の関係性を明らかにし、オーストリアにおける啓蒙専制の公共圏の解明に寄与した。こうした流れを受けて、筆者もヨーゼフ・リヒターのパンフレット『なぜ皇帝ヨーゼフは民に愛されないのか?』を分析し、当時のウィーンの啓蒙作家がヨーゼフ二世と敵対するのではなく、皇帝と共に改革に参加しようと試みていたことを明らかにした。

しかし、啓蒙専制期ハプスブルク君主国の公共圏の問題は、歴史学領域において未だ周辺分野に過ぎず、十分に研究されたとはいえない。特に筆者が問題としている点は、先行研究が18世紀後半から拡大しつつあった啓蒙主義のコミュニケーション・ネットワークを十分に考慮してこなかった点である。たとえば、ヴァンガーマンの研究では、パンフレットと政治との関係性が問題の中心を占め、パンフレットメディア自体に対する考察や

出版メディア間の相互作用を通して生じる情報の流通経路などに注意が払われることはなかった。公共圏と深く関わる情報の流通は、様々な出版メディアや書簡を通じて、一国内に留まることなく、国境を越えて広がっており、情報をめぐるコミュニケーション・ネットワークはそれぞれの国家システム、諸権力による統制、出版者の出版戦略などの様々な要素が絡み合い形成されていると想定された。そこで筆者はパンフレットなどの出版メディアを公共圏と結びつけたボディやヴァンガーマンの研究を踏襲しつつ、そこにかけていたネットワークという視点を入れることで、これまで「上からの啓蒙」あるいは「下からの政治運動」という直線的なモデルで考察されてきた啓蒙専制体制下の公共圏の問題を複雑な相互作用の中で問い直す視座が提供できると考えた。

こうした問題意識に立って筆者は本研究に着手する前にも、政府による情報政策や情報伝播の問題を中心に据え、啓蒙専制下の公共圏が政府によって垂直的にコントロールされるものではなく、複雑なネットワーク回路の影響下にあったことを明らかにしてきた。しかし、こうした研究の過程で新たな課題も発見された。コミュニケーション・ネットワークにおいて、どのようにして情報が流通し、それが国家システムからどのような影響を受けているのかに関しては明らかになったが、分析した史料の性質もあり、情報流通を担う出版者側がどういう思惑で戦略を練っていたのかに関しては、ウィーンの限定的な事例のみしか扱えなかった。ネットワークを問題とするためには、分析対象をウィーン以外にも広げる必要があるだろう。

また、筆者は警察文書や会社文書などの史料を駆使して、ウィーンの出版者ゲオルク・フィリップ・ヴーヘラーの出版活動を明らかにしてきたが、その過程で、多くの先行研究がヴーヘラーを俗悪な投機的な人物として描き、過激な出版物を販売していた理由は営利目的であると結論づけていることに違和感を感じるようになった。そして、この違和感を解く鍵はヴーヘラーの持っていた社会的ネットワークにあるという仮説を抱くに至った。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、ハプスブルク君主国の啓蒙専制体制下において、皇帝による「上からの啓蒙」と知識人による「下からの啓蒙」が交わる結節点である、出版者の社会的ネットワークの構造を分析することで、啓蒙専制期の公共圏の問題を明らかにすることである。

本研究で対象とするのは、ウィーンの出版者ゲオルク・フィリップ・ヴーヘラーの社会

的ネットワークであり、特に(1)出版業者間のネットワーク (2)ルター派プロテスタント共同体のネットワーク (3)秘密結社のネットワーク (4)改革不満層とのネットワークを重点的に研究することで、公共圏の問題に迫るものである。

### 3. 研究の方法

本研究では、出版者ヴーヘラーの社会的ネットワーク構造の確認とそのメカニズムの解明のために、以下の調査を実施した。

(1) ヴーヘラーと取引があった出版業者に関する史料調査。

(2) ヴーヘラーが勧誘したドイツ・ユニオン所属会員のプロソボグラフィ調査

(3) ウィーンのプロテスタント教会文書館の史料調査およびヴーヘラーのルター派ネットワークの解明

### 4. 研究成果

本研究の一番の成果は、研究期間全体を通じて、広範に収集した史料に基づいて、ヴーヘラーの宗派ネットワークの一端を明らかにするとともに、ドイツ・ユニオンを通じたネットワークがウィーンにおいてある種の思想の流通に一定の影響を持っていた可能性に迫ることができた点である。

書籍業関連の史料では、まず、オーストリア国立文書館でオーバーエスタライヒおよびニーダーエスタライヒの書籍業者に関する財務会計文書を幅広く収集した。分析対象としていたヴーヘラーに関する史料はほとんど含まれていなかったが、ウィーンで活動していた書籍業者の活動実態をはっきりとさせることで、間接的にヴーヘラーの社会的ネットワークの解明に寄与するものと考えられる。ハンガリーのブダペシュト市立文書館ではヴーヘラーと業務提携をしていたペシュトの書籍商ヴァインガンドの会計簿等の史料を収集した。この史料からヴーヘラーとヴァインガンドの間でどのような書物のやりとりがなされていたかがわかるとともに、ペシュトの書籍商がドイツ語圏のどの書籍商と取引をしていたのかも同時に判明した。ライプツィヒのドイツ書籍業組合図書館ではヴーヘラーがハレのセバステアン・フリードリヒ・ファブリツィウスに宛てた一通の書簡を発見した。この書簡はヴーヘラーがシュヴァルツライトナーの会社を引き継いだときにそれを知らせるために出されたものであるが、その中にはルター派の教会や学校設立の話題に触れている。

秘密結社ドイツ・ユニオン関連の史料では、まず、この結社に所属していたウィーン郊外在住の靴職人たちに関する史料をオ

ーストリア国立文書館で収集した。これは警察文書であり、異端的な発言が契機となり、ジャコバン派の嫌疑をかけられた靴職人たちの調書である。彼らの証言からこうした靴職人たちが読書を通じてカトリックの正統教義とは異なる宗教観を抱いていった様子が見てとれる。また、ウィーン司教座文書館では、ドイツ・ユニオンと関係していた聖職者に関する史料を収集した。こうした聖職者たちは上記の靴職人の思想形成に深く関与していた。彼らがドイツ・ユニオンであったことから、その幹部であったヴーヘラーとのつながりがあったと考えられる。ヴーヘラーの出版活動がある種の思想の布教活動を担っていた可能性を示唆させる。ドイツ・ユニオンやヴーヘラーの一定の影響力についてはある程度確認ができたため、今後さらに史料を丹念に読み込んでこうした関連性について論証の精度を高めていきたい。また、ライプツィヒ市立文書館では、ドイツ・ユニオンの幹部デーゲンハルト・ポットが逮捕された際の調書を収集した。この史料を用いることでドイツ・ユニオンのメンバーに関する情報がかなり得られる。今後、この史料の分析で得られたデータをヴーヘラーの社会的ネットワークの分析から判明したことと照合していくことで、ハプスブルク君主国だけでなく、ドイツ語圏全域に広がっていた秘密結社のネットワークについての考察に発展させたい。

最後に宗派ネットワークに関する史料では、まずウィーンのプロテスタント教会文書館でヴーヘラーが1780年代前半にルター派教会で活動していた痕跡を確認するとともに、彼が1786年に長老を辞任する経緯をうかがわせる書簡を収集することができた。また、ヴーヘラーがウィーンのプロテスタントネットワークに対して影響力を行使した現れの一つであるヴーヘラー編纂の『賛美歌集』の現物を確認した。ニュルンベルク市立文書館ではウィーンでルター派共同体を設立しようとした時におこなわれた資金援助を請うヴーヘラーの印刷された文書を発見した。また、このカテゴリーに前述のファブリツィウス宛の書簡も入れることができよう。

そのほかにもリンツのオーバーエスタライヒ州立文書館でも史料調査をおこなったが、ヴーヘラーの社会的ネットワーク解明に直接役立つ史料は発見できなかった。

今まで分析した史料からいえることは、ウィーンの書籍商ゲオルク・フィリップ・ヴーヘラーの出版活動がドイツ語圏各地の書籍業者やカトリック圏のプロテスタント支援団体、秘密結社ドイツ・ユニオンと結びつき

ながらおこなわれていたということである。ヴーヘラーが1780年代後半にヨーゼフ2世の啓蒙専制体制を批判するようなパンフレットを多数出版していたこととあわせて考えると、ヴーヘラーの社会的ネットワークがウィーンの啓蒙専制期公共圏に与えていた影響は少なくないように思える。相互に結びつきながらドイツ語圏全体に広がるネットワークを念頭に置いて出版活動を捉え直していくことは、啓蒙専制体制下の公共圏について考察する上で、また今まで単なる誹謗文書とされたものの別の側面を探求していく上で、一つの方法となるだろう。

研究成果については今後学術雑誌等で公表していくつもりである。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計6件)

上村敏郎、「半地下」のウィーン—18世紀後半のハプスブルク君主国における書物の流通—、日本18世紀学会年報、査読無、29巻、2014、19-21

上村敏郎、「一八世紀末ハプスブルク君主国における出版と統制 ウィーン書籍商ヴーヘラーの廃業処理を例にして」、史境、査読有、66巻、2013、43-61

上村敏郎、「居酒屋、職人、結社—18世紀末ウィーンにおけるビアハウスの中の「公論」、西洋近現代史研究会会報、査読無、27巻、2013、2-4

上村敏郎、書評 篠原琢・中澤達哉編著『ハプスブルク帝国政治文化史—継承される正統性』(昭和堂、2012年)、東欧史研究、査読無、35巻、2013、92-99

Toshiro UEMURA, Die Öffentlichkeit zur Zeit Josephs II. am Beispiel der Wiener Broschüren. Informationsverbreitung im aufgeklärten Absolutismus, *Mitteilungen der Gesellschaft für Buchforschung in Österreich*, 査読無、2012(1), 2012、115-121.

上村敏郎、「ヨーゼフ二世治下ハプスブルク君主国における「批判の自由」と言論紀律化—セーケイ事件をめぐるパンフレット騒動—、社会文化史学、査読有、55巻、2012、51-81

[学会発表](計4件)

上村敏郎、「啓蒙記の教育改革、コロキウム「教育のなかの宗教・古典・道徳—ハプスブルク君主国の場合—」、教育史学会 第57回大会、2013年10月14日、福岡大学(福岡県・福岡市)

上村敏郎、「半地下」のウィーン 18世紀後半のハプスブルク君主国における書物の流通、日本18世紀学会 第35回全国大会、2013年6月23日、一橋大学(東京都・国立市)

上村敏郎、「啓蒙専制期ハプスブルク君主国におけるコミュニケーションネットワーク—いかにしてウィーンで禁書は流通していたのか—、日本西洋史学会第63回大会 近世史部会2、2013年5月12日、京都大学(京都府・京都市)

上村敏郎、「居酒屋、職人、結社—18世紀末ウィーンにおけるビアハウスの中の「公論」—、西洋近現代史研究会、2012年6月23日、専修大学(東京都・千代田区)

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

上村敏郎 (UEMURA, Toshiro)

獨協大学・外国語学部・専任講師

研究者番号：20624662